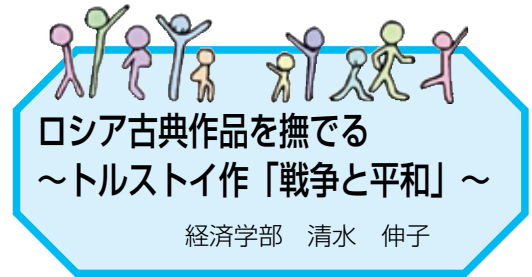




性がきわめて強いのは、学問を行う組合として大学がはじまったことに由来する。愛知大学は、勉強したい教師と学生が第二次世界大戦後、豊橋に集まってできた大学である。つまり愛知大学も、もとは教師と学生の組合であった。その成り立ちゆえに、中世のヨーロッパの大学の自立の精神と同様の精神が、今も愛知大学では生きているように思われる。

愛知大学の先学たちがたくさん本を集めることができたのも、おそらくこの成り立ちによる。その恩恵を被って、生の史料ではなく、刊本ではあるが、中世のヨーロッパで書き記された文書を、私たちは愛知大学で読むことができる。

今私が夢中になって読んでいる文献は、『アクタ・サンクトールム』Acta sanctorumである。それは、17世紀にボランドゥスという名のイエズス会士を中心に集まった人々の共同研究によって編纂された聖人たちの事績録であり、膨大な数の聖人伝や奇蹟録が含まれている。本文だけでなく、学術的に価値の高い註解もラテン語で書かれている。『アクタ・サンクトールム』は、千年以上ものヨーロッパの知の蓄積と幾世代にもわたる碩学たちの献身的な努力によって生み出された。愛知大学に赴任して、この文献が、豊橋図書館の書庫の本棚一面に陳列されているのを見たときは、驚かされたものである。一般の図書館などで見ることができる文献ではないので、在学中に書庫に入り、『アクタ・サンクトールム』の威容を見て、ヨーロッパの文化の重層的な蓄積を感じとって欲しい。



1. 今、古典ブーム到来！

それにしても、今回のLinguaのテーマは、なんと今の世の中の流れに一致しているのだろう。

常々、とっつきにくそうなものに興味を持ってもらうには、どうすればよいかと頭を悩ませている私は、この数年、NHK番組『100分de名著（注1）』の特に古典作品を扱う回で感心することが多い。なぜなら、古典作品は、現在社会に通じるもの、現在の私たちが共感できるものを含んでいる、だから古典作品は、時代を経て、書かれた地域を超えて、生き残っているのだということ、番組は上手く紹介しているからだ。

そして、2017年の出版界では、羽賀翔一による『漫画 君たちはどう生きるか』が話題となり、吉野源三郎の原作本（1937年）も書店売り上げの上位を占めるということが続き、2018年春のテレビ界では、『モンテ・クリスト伯』（デュマ作、1844-46）の放映が始まっているのだ。

日本の制作会社がドラマ化する本を探していき着いたのが19世紀フランスの小説家デュマの作品ということならば、きっと他にも面白い古典作品はある！もう、これは、古典作品を読まないに損だという気になってくるのではないか。

さて、ロシア古典作品として、今回のLinguaではトルストイの『戦争と平和』（1865-69）を取り上げる。

『戦争と平和』は大変長い作品で、名前が出てくる登場人物は全部で500人以上もおり、読み始めても、その長ささと登場人物の人間関係の複雑さで挫折してしまう作品であるが、いろいろな読み方ができる作品である。

2. 悩める若者よ、読むべし！

『戦争と平和』は2016年にBBC放送でもドラマ化されている（全8回）。昨年、BS放送で放

送されたばかりなので、これを見た人も多いのではないかと思う。

ドラマ化や映画化する場合には、全ての登場人物が出てくることはない（多すぎて、それは不可能！）。必ず『戦争と平和』の主たる登場人物たちの恋愛エピソードに絞られて脚本は作られている。

恋愛小説としての『戦争と平和』の主軸は3人の若者の物語にある。

恋に傷つきながら真の愛を理解する女性となる少女（ナターシャ・ロストフ）の成長物語であり、どう生きていくべきか悩みながら生きる者（ピエール・ベズーホフ伯爵、作者トルストイ自らがモデルであると言われている）と、自分が正しいと思うことと社会との折り合いをどうつけるべきかに悩む者（アンドレイ・ボルコンスキー公爵）の人生の物語である。

人生の意味を問い続けて迷う姿と、自分だけの正しさを持ち、それを堅持しようとする潔癖さは、いつの時代でも見られる若者像であり、『戦争と平和』は、若者が大人になる際に遭遇する苦悩は同じであると教えてくれる。

3. 歴史好きは読むべし！

しかし、映画やドラマではなくて、小説『戦争と平和』を読めば、この作品は、ナポレオン戦争時代を描いた歴史小説であることがわかる。

したがって、『戦争と平和』には、ナポレオンと闘いながら、ロシア人は何を考えていたのか？といったことが描かれているのだ。

例えば、ナポレオンのことをたまたま成功した成り上がり者だと侮る人たちも描かれているが、これとは逆に、ピエール・ベズーホフ伯爵やアンドレイ・ボルコンスキー公爵のように、ナポレオンは社会の矛盾を解消するために現れ、また解消する能力があるから支持されている、偉大な人物だという見方をする人たちも描かれている。そして、後者の見方をする人たちは、ナポレオンに対して、ロシアに攻めてくる敵でありながらも、この世の中が変わるきっかけとなるのではないかと期待し、そして自らもナポレオンのように英雄となることを夢想するのである。

『戦争と平和』を読めば、ナポレオン戦争時代のロシア社会が、この時すでに内包していた矛盾と混乱のせいで、ロシアは、最終的に1917年の革命に至ったのだということに納得できるのだ。

そして、2018年現在、世界は、シリア問題やイラク核合意履行問題などで、大国同士がお互いに避難し合い、ある国が他国への空爆を行っている。戦場から遠くにいる日本人が今読むべき作品であると思う。戦争は、戦場で戦う者はもちろん、戦場に行かない者の日々をも破壊する。特に、従軍している兄たちに憧れ、兄たちを追って前線に出て、最初の戦いで頭を打ちぬかれて死ぬ少年ペーチャは哀れであり、戦争の残酷さと無意味さを感じないではいられない。

『戦争と平和』は、今まで5人の翻訳者によって翻訳されているが、歴史小説として『戦争と平和』を読むとすれば、トルストイ研究者である藤沼貴氏の『戦争と平和 全6巻』（岩波文庫）が秀逸である。本棚で、6巻が揃って並んでいるのを見ただけで手を引込めたくなるが、ナポレオン戦争時代のロシア社会を理解しながら読み進められるように、当時のロシア社会事情や文化、ロシア史についてのコラムが全部で38テーマ挿入されており、その解説は大変充実している。

4. 見覚えのある人たち

最後に、500人を超える登場人物がいる『戦争と平和』は、まるで人間図鑑とも呼べる。滅私の心、公正さを保とうとする者、そしてその反対に、他人を押しつけてでも自分の利益や優位を確保しようと画策する者、世の中に絶望しあきらめている者、、今の社会を思い返してみると、自分が出会った人、最近、新聞やテレビで取り上げられる人の顔が浮かぶはずである。

『戦争と平和』はいろいろな読み方ができる作品なのだ。さあ、『戦争と平和』を読もうではないか！

（注1）手に取ることをためらったり、一度手を出して挫折した古今東西の名者を紹介することを目指した番組。